

R.ヴァーグナーの楽劇『神々の黄昏』における
ハーゲン像の特質

石 川 栄 作

稲元蒔先生古稀記念ドイツ文学・語学論集

2003年4月1日発行

R.ヴァーグナーの楽劇『神々の黄昏』における ハーゲン像の特質

石 川 栄 作

序

リヒャルト・ヴァーグナー（1813-83）の楽劇『ニーベルングの指環』四部作——『ラインの黄金』、『ヴァルキューレ』、『ジークフリート』および『神々の黄昏』——は、一つの指環をめぐる神々、侏儒、巨人、人間が相争い、ともに滅びていく物語である。「ニーベルング」とは、具体的には、地下の国ニーベルハイムの侏儒王アルベリヒを指し、このアルベリヒが愛を断念してラインの河底から黄金を奪い去ったことから滅びの物語が展開し始める。アルベリヒは、すなわち、その黄金から指環を作り、それをもって世界を支配しようと考えたのであるが、しかし、指環は神々の長ヴォータンに奪い取られてしまい、その恨みから指環に呪いをかける。『指環』四部作全体はこの呪いの物語であり、以後この指環をめぐる展開される権力闘争はヴォータンとアルベリヒの争いにほかならない。ヴァルハラ築城の報酬として指環を巨人ファフナーに譲り渡したヴォータンは、地上に降りて双子の兄妹を産み、その双子の兄妹から産まれる英雄ジークフリートに指環奪還の夢を託したのに対して、アルベリヒはある王妃との間に不義の息子ハーゲンを儲け、『指環』四部作最後の作品『神々の黄昏』においてその息子を介して指環を奪い返そうとするのである。ヴォータンとアルベリヒの戦いはこうして今やジークフリートとハーゲンの争いとなり、ジークフリートはハーゲンの謀略によって暗殺される。楽劇『神々の黄昏』においてあらすじを動かしているのは、もはやジークフリートではなく、侏儒王アルベリヒの息子ハーゲンであり、ハーゲンこそ呪いの悲劇の展開になくてはならない重要な人物である。本稿では、このハーゲンに焦点を合わせて楽劇『神々の黄昏』¹⁾の展開を辿りながら、ハーゲン像の特質を探り出すことによって、この作品全体の意味するところを明らかにすることにしよう。

1. ニーベルンゲン伝承におけるハーゲン像

序でも述べたように、ハーゲンはヴァーグナーの楽劇『神々の黄昏』では侏

儒王アルペリヒの息子として登場し、しかもライン河畔ギービヒ家の当主グンターとは異父兄弟ということになっている。このグンターとハーゲンの間柄についてはニーベルンゲン伝説においてはおおまかに分けて、1) グンターの実弟とする伝承、2) 異父兄弟とする伝承、3) 親族で、重臣とする伝承という三つのタイプに分けられる。ヴァーグナーの楽劇『神々の黄昏』におけるハーゲン像を理解するために、ここで簡単に従来のニーベルンゲン伝説におけるハーゲンの出自をまとめておくことにしよう。

まずハーゲンをグンターの実弟とする第一のタイプの伝承としては何よりも『ヴォルスンガ・サガ』²⁾が挙げられよう。そこではラインの南に君臨していたギューク王は魔法使いのグリームヒルトを妻に持ち、二人の間にはグナル、ホグニ、グットルムという三人の息子のほかに、グズルーンという一人の娘がいたとされている。『歌謡エッダ』中の「シグルズの歌」(断片)³⁾ではこの点に関する叙述は欠落しているが、おそらくほぼ同じ内容の記述であったろうと推定される。これらと同時代に書かれた『スノリのエッダ』⁴⁾では若干異なって、ギューク王は妃グリームヒルトとの間にグナル、ヘグニ、グートルーン、グートニの四人を儲け、ゴットルムはギューク王の継子であったとされている。娘グートニの記述やゴットルムが継子であったという記述は、ほかの伝承では見出されないが、ヘグニがグナルの実弟とされていることは『ヴォルスンガ・サガ』と変わりはない。このタイプの伝承はその後ハンス・ザックスの戯曲『不死身のゾイフリート』⁵⁾やド・ラ・モット・フケーの戯曲『大蛇殺しのジグルト』⁶⁾などにおいても見出される。

これに対してハーゲンをグナルの異父兄弟とする第二のタイプの伝承を伝えているのが『ティードレクス・サガ』⁷⁾である。しかもこの作品ではギービヒに代わってアルドリアーンという名称が用いられ、その王国もニフルンゲン国(首都ヴェルニッツァ)と呼ばれ、国王アルドリアーンにはグナル、ゲールノーツ、ギーゼルヘルおよびグリームヒルトという四人の子供がおり、ヘグニはその四人とは異父兄弟の間柄であったとされている。そのヘグニの出生については同じ作品の別の箇所ですく記述されており、それによると、アルドリアーンの妃——そのあとの箇所ではオーダという名前がつけられている——が、ある日ワインに酔って戸外の庭で眠り込んでしまったときのこと、そこへ一人の妖怪(アルプ)が現れて彼女のそばに横になった。王妃は目覚めたとき、それを夫アルドリアーンだと思ったが、その男はすぐに姿を消してしまったので、確認できなかった。その後、王妃は妊娠し、産褥の前に再度同じ妖怪の男がやって来て、やがて生まれる子供は自分の子であり、勇敢な英雄になるだろうと

言い残して、姿を消してしまった。こうしてこの王妃から生まれたのがヘグニであり、彼は人間のようには見えず、まさに妖怪 (Troll) であったという。

これら二つのタイプの伝承と異なって、ハーゲンをグンター王の重臣だとしているのが第三のタイプの伝承であり、その代表がドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』⁸⁾ である。この作品ではライン河畔ヴォルムスに居城を構えて権勢を誇っていたのは、グンテル、ゲールノートおよびギーゼルヘルというブルゴント族の三人兄弟で、彼らの妹がクリエムヒルトであった。彼らの父はダンクラート、母はウオテといい、父王ダンクラート亡きあと、グンテル王が二人の弟とともに多くの家来をかかえてその国を治めていた。その第一の重臣として挙げられるのがトロネゲのハゲネであり、その実弟がダンクワルトである。ハゲネは『ニーベルンゲンの歌』前編冒頭ではブルゴント王家の親戚とは明示されていないが、あとでクリエムヒルトが口にする言葉 (898詩節) から血族であることが分かる。さらに『ニーベルンゲンの歌』後編になると、ハゲネの父についても言及されており、それによると、ハゲネの父はアルドリアーン (1939詩節) といい、かつては家来としてエッツェル王に仕えて名声を博したこともあり、その子ハゲネはスペインのワルテルとともに人質としてエッツェル王のもとで成人した (1756詩節) という。アルドリアーンという名称が用いられている点で第二のタイプの伝承とまったく無関係であるとも言い切れないが、しかし、ハゲネはグンテル王の重臣という点でそれとはまったく別のタイプに属する伝承として区別しなければならないであろう。ハゲネをブルゴント王家の親族とする『ニーベルンゲンの歌』の記述を受けて、フリードリヒ・ヘッペルはその戯曲『ニーベルンゲン』三部作⁹⁾ においてハーゲンをクリームヒルトの伯父として登場させている。これら第三のタイプの伝承で特徴的なのは、ハーゲンが常にグンター王に助言を与え、グンター王に代わって実権を握っていることであり、ニーベルンゲン悲劇はこのハーゲンの企みによって展開されているということである。

2. ヴァーグナーにおけるハーゲンの出自

ギービヒ家あるいはブルゴント王家とハーゲンの関係については上記のように三つのタイプに分類されるのであるが、ヴァーグナーは楽劇『神々の黄昏』の台本を書くにあたって、ハーゲン像を形象する際には一体どのタイプの伝承を直接の素材として用いたのであろうか。

まずヴァーグナーは1848年に『ジークフリートの死』(『神々の黄昏』の原型)¹⁰⁾

を書き上げる前に散文草稿として『ニーベルンゲン神話』¹¹⁾を書いており、その中でハーゲンの出生について記述している。それによれば、グンターの母グリームヒルデはかつて「アルベリヒに手ごめにされ、不義の子ハーゲンを産んだ」としている。この事情は『神々の黄昏』第一幕冒頭ではグンターとハーゲンの対話の中でかすかにほのめかされているに過ぎないが、第二幕冒頭ではアルベリヒとハーゲンの夢魔的対話において明らかにされている。ハーゲンがこのような不義の子として生まれ、グンターの異父兄弟として登場している点では、第二のタイプの伝承を利用していることが明らかである。

しかし、ヴァーグナーが主な素材として用いたのは第一のタイプの伝承に属する『ヴォルスンガ・サガ』——それに類する作品としてド・ラ・モット・フケーの戯曲『大蛇退治のジグルト』も考えられる——であろう。ただその北欧の作品においてはあらすじを動かしているのは、グンナルの母、すなわち、邪悪な王妃グリームヒルドであったが、ヴァーグナーの楽劇ではその悪魔的な役割をハーゲンが受け継いでおり、ハーゲンこそ物語の展開になくてはならない存在となっていると言えよう。

ハゲネ（ハーゲン）がグンテル（グンター）に助言を与えたりして、あらすじの展開に重要な人物であるという点では、第三のタイプの伝承に属する『ニーベルンゲンの歌』の影響も当然のことながら考えられる。ただこの中世英雄叙事詩では侏儒アルプリーヒ（アルベリヒ）はブルゴント族の重臣ハゲネ（ハーゲン）とはまったく種族が異なり、無関係の存在であったが、その従来のニーベルンゲン伝承の殻を打ち破って、二人を結びつけて、ハーゲンをアルベリヒの息子としたのはヴァーグナーの最も顕著な功績である。

このようにヴァーグナーは楽劇『神々の黄昏』の台本を書くにあたって、これら三つのタイプの伝承をすべて把握し、それらをさまざまな場面で巧みに織り混ぜながら、自らのニーベルンゲン世界を構築していったと考えられる。以下、それらの素材が実際に作品の中へどのように織り込まれているか、あらすじの展開に沿って確認しながら、ヴァーグナーにおけるハーゲン像の特質を探り出すことにしよう。

3. ハーゲンの陰謀——楽劇『神々の黄昏』第一幕——

ヴァーグナーは『神々の黄昏』第一幕の前に序幕を置いているが、そこでは三人のノルンたちによってアルベリヒのことが少し語られるだけで、その息子ハーゲンはもちろん現れないし、語られてもいない。ハーゲンが初めて登場す

るのは『神々の黄昏』第一幕第1場である。この場面でハーゲンがグンターの異父兄弟であることがほのめかされており、ハーゲンが正統の血を受けたグンターをうらやましいと思えば、グンターは逆に知恵を授かったハーゲンをうらやましく思い、その助言には常に感謝している。その超人的な知恵でもってグンターを操っているという点で、ハーゲンは明らかに『ヴォルスンガ・サガ』における魔法使いで邪悪な母后グリームヒルドの役割を受け継いでいると言える。ヴァーグナーの作品では、その母后グリームヒルドに代わって、ハーゲンがグンターの花嫁候補としてブリュンヒルデの存在を教えるのである。

Ein Weib weiß ich,	世界で最もすばらしい
das herrlichste der Welt:	女性をわしは知っている。
auf Felsen hoch ihr Sitz,	彼女の住居は高い岩山の上にあり、
ein Feuer umbrennt ihren Saal;	その部屋の周りを炎が取り囲んでいる。
nur wer durch das Feuer bricht,	炎を突き破ることのできる者だけが、
darf Brünnhildes Freier sein.	ブリュンヒルデに求婚できるのだ。

ハーゲンはこのようにグンターにブリュンヒルデへの求婚を勧めると同時に、さらにその花嫁の部屋の周りの炎の壁を突き破ることのできる者としてジークフリートを挙げ、彼をグートルーネの夫に迎えるよう進言する。ハーゲンがジークフリートとグートルーネを結びつけようとしている点では『ニーベルンゲンの歌』の影響も認められよう。事実、その作品においてハゲネがジークフリートの冒険譚をグンテル王らに語って聞かせたように、ここでもハーゲンがジークフリートの蛇退治と財宝獲得の冒険について歌って聞かせるのである。

Vor Neidhöhle	妬みの洞窟の中で
den Nibelungenhort	ニーベルンゲンの財宝を
bewachte ein riesiger Wurm:	巨大な蛇が護っていたが、
Siegfried schloß ihm	ジークフリートは
den freislichen Schlund,	その恐ろしい口を塞ぎ、
erschlug ihn mit siegendem Schwert.	勝利の剣でそれを打ち殺した。
Solch ungeheurer Tat	このようなものすごい冒険で
enttagte des Helden Ruhm.	英雄としての名声を轟かせたのだ。

このように語るハーゲンは、ジークフリートの所有するニーベルンゲンの財宝の中でも、「世人の熱望する秘宝」であるニーベルングの指環を自分のものにしたいと欲し、その指環強奪のチャンスをつかむためジークフリートをグンターの妹グートルーネに結びつけようと画策しているのである。そのための秘策としてハーゲンは不思議な忘れ薬を用いることを兄と妹に打ち明ける。素材の

『ヴォルスンガ・サガ』では母后グリームヒルドがこの秘薬をシグルズに差し出すが、ヴァーグナーではハーゲンの指図に従ってグートルーネがジークフリートに飲ませるのである。しかもこの秘薬に関して重要なことは、北欧の素材ではその薬でシグルズがブリュンヒルドのことをすっかり忘れてしまうだけであるのに対して、ヴァーグナーではジークフリートが出会った過去の女性をすべて忘れさせるとともに、目の前にいる女性にたちまち惚れさせてしまうという効き目を持っていることである。ここにヴァーグナーの秘薬の特質があると言ってよいであろう。このような秘薬の存在を聞き知ったグンターとグートルーネは、ジークフリートに興味を抱き始め、やがてその英雄がこのギービヒ家にもやって来るであろうことをハーゲンから聞かされると、喜んで英雄を出迎えることを決意するのである。

ハーゲンの予想通り、さっそくライン河から角笛が聞こえて、英雄ジークフリートが小舟に馬を積み込んでギービヒ家の館に近づいて来る。到着のジークフリートは戦う姿勢を見せはするものの、グンターが自分を歓迎してくれることを悟り、快く歓迎に応じる態度を見せる。『ニーベルンゲンの歌』において見られる今にも争いとなるような緊張感は少しも感ぜられない。しかし、ハーゲンがすでに何かを企んでいることはその英雄叙事詩と何ら異なるところはない。ハーゲンはジークフリートから巧みにニーベルンゲンの財宝のことを聞き出し、その財宝の一つである隠れ頭巾を見せられると、それについての知識を持ち合わせていないジークフリートに次のように教えるのである。

Der Tarnhelm kenn ich,
der Nibelungen künstliches Werk:
er taugt, bedeckt er dein Haupt,
dir zu tauschen jede Gestalt;
verlangt's dich an fernsten Ort,
er entführt flugs dich dahin.

その隠れ頭巾なら知っている。
ニーベルング族が作った品物だ。
それを頭に被れば、
どんな姿にもなれるのだ。
どんな遠い所へも行きたい所へ
飛んで連れて行ってくれるのだ。

『ヴォルスンガ・サガ』では母后グリームヒルドがシグルズとグンナルに姿を交換する魔法を教えたところのみで、隠れ頭巾についての記述は見出されない。そもそもこの隠れ頭巾は五、六世紀のニーベルンゲン伝説の原型にも、また北欧のニーベルンゲン伝説にも見出されず、『ニーベルンゲンの歌』において初めて取り入れられたもので¹²⁾、そこで語られているところによると、その隠れ蓑はジークフリートが冒険の旅でアルプリーヒから奪い取ったものであり、それを身につけると、姿が見えなくなるばかりか、自分自身の力の外に十二人分の力が加わる（336-8 詩節）という。ヴァーグナーはこの『ニーベルンゲンの歌』にお

ける隠れ蓑に若干の変更を加えて、それを被ればどんな姿にも変身でき、どんな遠い所へも一飛びで辿り着くことができるとしたのである。このような隠れ頭巾の不思議な力をヴァーグナーにおけるジークフリートは、ここで初めてハーゲン、すなわち、その隠れ頭巾を鍛冶屋ミーメに作らせた、まさにあの侏儒アルベリヒの息子であるハーゲンから聞き知ったのである。この隠れ頭巾の知識をジークフリートに授けたのもハーゲンの策略であり、ハーゲンは今やブリュンヒルデが指環を手に行っていることを確信すると、グートルーネを介してジークフリートに歓迎の飲み物として例の忘れ薬を差し出す。ジークフリートはそれを口にするとたちまちブリュンヒルデのことを忘れ果てて、目の前にいるグートルーネに恋心を燃え上がらせてしまう。彼女の美しさの虜になってしまったジークフリートは、さっそくグートルーネに契りを求めるが、彼女はへりくだった様子で頭を下げて、よろめきながらその場を立ち去ってしまう。何としても彼女と契りを結びたいジークフリートは、グンターに向かって妻がいるかと尋ねる。「一人の女性に心をかけているが、彼女の住む岩山の住居の周りを炎が取り囲んでいるので、勝ち取る手立てがない」ことを聞くや、ジークフリートはグートルーネを妻に与えてくれることを条件にして、手助けを約束する。グンターもその条件に応じ、こうして両者の間で契約が成立する。この契約は『ヴォルスンガ・サガ』には読み取られず、『ニーベルンゲンの歌』の同様の場面(332-4 詩節)に由来すると考えられるが、『ニーベルンゲンの歌』ではそのあとわずか一行で「二人は互いに誓いをかためた」(335 詩節)と語られているだけであるのに対して、ヴァーグナーはそれを敷衍し、兄弟の契りを交わす場面を詳しく展開させることによってその「兄弟の誓い」に大きな意味を込めている。ハーゲンがのちにジークフリートを暗殺する口実としたのも、このグンターとの契りをジークフリートが破ったからであるとしている。しかし、ハーゲンの魂胆は最初からニーベルングの指環を奪い取ることにあり、いずれ最後にはハーゲンはジークフリートを暗殺しなければならない。そのためこの場面ではハーゲンは「兄弟の契り」に加わらないのである。ハーゲンの魂胆は、グンターがさっそくジークフリートを連れて出かけて行ったあとで、次のように独り言をつぶやくことから明らかである。

Hier sitz ich zur Wacht,
wahre den Hof,
wehre die Halle dem Feind.
Gibichs Sohne

ここにすわってわしは見張り、
屋敷を守り、
館を敵から守る。
ギービヒの息子は

wehet der Wind,
 auf Werben fährt er dahin.
 Ihm führt das Steuer
 ein starker Held,
 Gefahr ihm will er bestehn.
 Die eigne Braut
 ihm bringt er zum Rhein;
 mir aber bringt er — den Ring!
 Ihr freien Söhne,
 frohe Gesellen,
 segelt nur lustig dahin!
 Dünkt er euch niedrig,
 ihr dient ihm doch,
 des Niblungen Sohn.

風に吹かれて、
 求婚の旅に出かけて行く。
 彼のために舵を取っているのは
 一人の強き英雄で、
 彼のために危険に立ち向かっている。
 自らの花嫁を
 彼はこのラインに連れて来るのだ。
 だがわしには指環を持って来るのだ！
 お前たち、元気な若者たちよ、
 楽しげな仲間よ、
 愉快に舟を走らせるのだ！
 お前たちには低劣に見えようが、
 しかし、お前たちこそ、このニーベ
 ルングの息子に仕えているのだ。

この言葉から、ハーゲンがブリュンヒルデがすでにジークフリートの花嫁であることを知っていることが明らかである。グンターとグートルーネはもちろんそのことを知らないし、ジークフリートはブリュンヒルデに関するすべての記憶を失っている。すべてがハーゲンによって操られていることが容易に理解されよう。『神々の黄昏』におけるあらすじは、このハーゲンの陰謀によって展開されていると言ってもよいであろう。

4. 妖怪アルベリヒの息子ハーゲン —— 楽劇『神々の黄昏』第二幕 ——

このようにハーゲンは二組の結婚を成立させることによってニーベルングの指環を手に入れようと画策するのであるが、その彼の心の奥底が最も明確に描かれているのが第二幕冒頭の夢魔的対話においてであろう。夜、ギービヒ家の柱にもたれかかって眠っているハーゲンの前に父アルベリヒが現れて、父子の間で交わされるこの「不気味な夢魔的対話」は、従来のニーベルンゲン伝承においてはどこにも見出されない、ヴァーグナー独自の創作部分である。それだけにこの場面におけるハーゲンの人物形象はヴァーグナーにおけるハーゲン像の特質であると言ってもよいであろう。

まずアルベリヒが眠っているハーゲンに話しかける言葉から、上ですでに述べたハーゲンの出生に関する事情が読み取られる。父アルベリヒは息子に向かって「お前の母はわしのために、お前を勇敢な男に産んでくれたのだ」と言いながら、息子に授けられた「力」を思い起こさせるが、それに対してハーゲン

は次のように答える。

Gab mir die Mutter Mut,
nicht mag ich ihr doch danken,
daß deiner List sie erlag:
frühalt, fahl und bleich,
haß ich die Frohen,
freue mich nie!

母はわしに勇気を与えてくれたが、
お前の策略に屈した
女には感謝したくはない。おかげで
わしは早く年をとり、陰気で青ざめた
顔をして、陽気な者たちを憎み、
決して喜ぶことはない！

超人的な力を授けられたとはいえ、ハーゲンはアルベリヒの策略に屈した女から生まれた自らの出生に強い劣等感を抱いていることが明らかである。その出自の劣等感からハーゲンは、陰うつで、決して喜びを味わうこともなく、陽気な者たちを常に憎んでいる。「陽気な者たち」とは、上述のハーゲンの独り言（第一幕第2場）からも分かるように、自らの異父兄弟をも含めた陽気な者たち一般を指しているが、なかでもまず第一にヴォータンが儲けたヴェルズング一族を意味していることは言うまでもない。ヴォータンから指環を奪われて「喜びもなく、苦しみを負わされた」父アルベリヒも、息子ハーゲンに「陽気な者たち」を憎むようけしかけて、ヴェルズング族を打ち倒すよう励ます。そのヴォータンは自らのヴェルズング族（ジークフリート）によって打ちのめされて、権力と勢力を失い、不安にかられて終焉を待っているだけなので、今こそ彼の一族を倒す絶好の時機だというのである。「永遠の神々の権力は、誰が引き継ぐのか」と尋ねるハーゲンに、アルベリヒは「わしと、そしてお前だ！わたたちが世界を受け継ぐのだ」と答えて、ヴォータンを打ちのめしたヴェルズング（ジークフリート）が「大蛇ファフナーを戦いで倒して、やすやすと指環を手に入れた」ことを語って聞かせる。アルベリヒはこの指環の所有者ジークフリートを倒したいが、この英雄には彼の呪いも効き目がない。英雄は「指環の価値を知らず、うらやましいその指環の力を全然利用しない」からである。そのうち指環がその英雄を愛している一人の賢い女によってラインの乙女たちに返されることにでもなれば、黄金の指環はもはやいかなる策略を用いても取り戻せなくなる。だから今こそ「指環をねらうのだ」と励まして、アルベリヒは息子ハーゲンを儲けた理由を明らかにする。

Dich Zaglosen
zeugt' ich mir ja,
daß wider Helden
hart du mir hieltest.

恐れを知らぬお前を
わしが産んだのも、
英雄たちに対して
お前がわしを守ってほしいからだ。

Zwar stark nicht genug,
den Wurm zu bestehn,
was allein dem Walsung bestimmt,
zu zähem Haß doch
erzog ich Hagen,
der soll mich nun rächen,
den Ring gewinnen
dem Walsung und Wotan zum Hohn!

確かに大蛇を倒すには
十分強いとはいえない。それは
ヴェルズングだけにできること。
しかし、わしはハーゲンを
粘り強い憎しみへと育て上げたのだ。
お前は今やわしの復讐をし、
指環を獲得し、ヴェルズングと
ヴォータンをあざ笑うのだ!

ハーゲンはアルベリヒの憎悪をそのまま受け継いで、この世に生まれ出てきたことが明らかである。ハーゲンはもはや『ニーベルンゲンの歌』においてのようにヴォルムス繁栄のためにニーベルンゲンの黄金をねらうのではない。父アルベリヒから受け継いだ「粘り強い憎しみ」から指環を取り戻し、世界を掌握して、ヴェルズングとヴォータンをあざ笑うため、つまりは「陽気な者たち」への復讐のためなのである。ここにヴァーグナーにおけるハーゲン像の特質があると言えよう。このような父アルベリヒの要求に対して息子ハーゲンも、指環を取り戻すことを約束し、自らにそれを誓うのである。この父子の対話がハーゲンの夢というかたちで展開されることによって、ハーゲンの指環への執着は今や父アルベリヒよりも強くなっていると言ってもよいであろう。

ハーゲンがこうして静かに眠りながら一行の帰りを待ち受けているところに、ジークフリートが一足先に戻って来る。ジークフリートは目覚めたハーゲンと、そのハーゲンの呼び出しに応じて館の中から出て来たグートルーネに向かって、グンターの求婚がうまくいったことに関して自らの手柄話を話して聞かせるが、彼自らがハーゲンに操られていることにはまったく気づいていない。新郎新婦を出迎える準備をしてほしいことを伝え、グートルーネとともに楽しげに館の中へ入って行くだけである。一方、ハーゲンはさっそくギービヒ家の家臣たちを呼び集めて、新郎新婦を出迎える準備を整えさせ、最後に数人の家臣のところに近づいて、「女主人にやさしくして、彼女に忠実に手を貸すのだ。彼女が苦しみに見舞われたら、ただちに復讐するのだ」と命じる。これから何らかのいざこざが起きることをハーゲンはすでに予想しているのであり、陽気なジークフリートとは対照的である。

ハーゲンの予想通り、新郎新婦がギービヒ家の館に到着した瞬間から、不穏な雰囲気漂っている。一同が歓声を上げる中、グンターは厳かにブリュンヒルデの手を取って案内するが、彼女は青ざめた顔を伏せたままである。グンターによってギービヒ一族の面々に紹介されても、彼女は決して目を上げようと

しない。ジークフリートがグートルーネを伴って館の中から出て来て、その名前がグンターによって呼ばれたとき、ブリュンヒルデは初めて驚いて目を上げる。目の前にジークフリートを認め、彼がグートルーネと結婚することを耳にすると、よろめいて倒れそうになる。彼女は「ジークフリートが自分を知らない」ことで、すっかりと心を乱している。彼女の心は、指環をジークフリートの指に見つけたとき、さらに激しく揺れ動く。それはグンターが岩山で彼女から奪い取ったはずのものだからである。指環のことを詰問されたグンターはひどくうろたえて黙っているだけなので、ブリュンヒルデは欺きを察して、「指環をもぎ取ったのはこの男、欺きの盗人ジークフリートです」と言って、ジークフリートを責めるが、彼は指環を見つめたまま、遠い昔を思い出して、大蛇退治の際に勝ち得たものだとは答える。ハーゲンにとっても指環がジークフリートの指にあることは予定外のことであったが、策略に長けたハーゲンは今やこの瞬間をうまくとらえて、二人の間に割って入り、「彼女がグンターに与えた指環なら、ジークフリートはそれを欺きでもって勝ち得た」と主張し、「不誠実な者はその償いをしなければならない」と訴えるのである。ハーゲンの抜け目なさが容易に読み取られよう。ブリュンヒルデが怒りのあまり「真相」を打ち明けて、ジークフリートが誓いを立てなければならなくなったときも、ハーゲンはすかさず誓いの武器として自分の槍の穂先を提供する。ジークフリートはその槍の穂先にかけて、グンターとの契りを破っていないことを誓うが、これによってハーゲン自身はジークフリート殺害の正当な理由を勝ち得たのである。

狡猾なハーゲンの策略は、こうしてジークフリートが誓いを立てて、ひとまず結婚の宴のために館の中へ入って行ったのちも続く。その場に残ったのはブリュンヒルデとグンターとハーゲンの三人であり、グンターはひどい恥辱を受けて、沈み込んでいる。ブリュンヒルデも考えにふけてがっかりと頭を沈めている。ハーゲンはこの二人の揺れ動く心理を巧みにとらえるのである。ハーゲンはまず恥辱を受けたブリュンヒルデに復讐の手助けをすることを申し出るとともに、彼女にうまく取り入ってジークフリートの弱点——彼は決して敵にうしろを見せなかったので、ブリュンヒルデは彼の背中に魔術をかけなかったという——を聞き出すことにも成功する。同様に恥辱に苛まれるグンターに向かって、ハーゲンは「ジークフリートの死だけがその恥辱をあがなう」ことを主張してから、密かに次のように付け加えて言う。

Er falle — dir zum Heill
Ungeheure Macht wird dir,

彼を倒すのだ。お前の至福のために！
彼から指環を奪い取ったら、

gewinnst von ihm du den Ring, 大きな権力がお前のものとなる。
den der Tod ihm wohl nur entreißt. 指環をもぎ取るのも彼の死だけだ。

指環をねらうハーゲンの魂胆が明示されている。それでもグンターは妹グートルーネのことを心配するので、ハーゲンは「明日、狩りに出かけて、・・・猪が彼を殺したことにしよう」と提案する。こうして三人は三重唱でジークフリート殺害を誓い合うのであるが、その三重唱の中でもハーゲンの歌詞は次のようになっている。

Sterb' er dahin,	彼は死んでいくのだ、
der strahlende Held!	輝く英雄よ！
Mein ist der Hort,	財宝はわしのものであり、
mir muß er gehören.	わしのものでなければならぬ。
Drum sei der Reif	だから指環を
ihm entrissen.	彼からもぎ取るのだ。

ハーゲンが徹底して指環に執着していることが明らかである。ハーゲンにとってジークフリートの死は彼から指環をもぎ取るためのものであることが容易に理解されよう。妖怪アルベリヒの息子ハーゲンは父の「憎悪」を受け継いで、その指環を奪い返すことによって、「陽気な一族」に復讐を遂げようとしているのである。

5. ハーゲンによるジークフリート暗殺——楽劇『神々の黄昏』第三幕——

その妖怪アルベリヒの「憎悪」に由来する復讐がいよいよ成し遂げられるのが第三幕においてである。序幕冒頭では三人のノルンによって神々の黄昏がほのめかされたように、第三幕冒頭においては三人のラインの乙女たちによってジークフリートの暗殺が予言される。このジークフリート暗殺についてはニーベルンゲン伝説では大きく二つのタイプ——ベッドの中での暗殺と森の中での暗殺——に分けられる。『ヴォルスンガ・サガ』やフケーの戯曲では前者の伝承タイプに従ってベッドの中で、しかもグットルムによって暗殺されるのに対して、『ニーベルンゲンの歌』や『ティードレクス・サガ』ではジークフリート（ジークフリート）が森へ狩りに出かけた際にハゲネ（ハーゲン）によって暗殺されることになっている。ヴァーグナーが素材としたのは明らかに後者の伝承タイプに属する『ニーベルンゲンの歌』であるが、ヴァーグナーのテキストを詳細に分析してみると、ヴァーグナーにおいてはその中世英雄叙事詩とはことごと

く裏返しのかたちで展開されていることが明らかとなってくる。

まず『ニーベルンゲンの歌』ではジークフリートは狩りで多くの獲物を射止め、最後には熊を生け捕りにして称賛されたりしたのに対して、ヴァーグナーでは熊を追っているうちにライン河畔の低地に迷い込んでしまい、獲物の行く方を見失ってしまう有様である。やがてギービヒ家の男たちがそこへやって来て、ハーゲンの提案で食事の準備をすることになるが、ジークフリートは獲物を提供することができない。「獲物なしなのか？」というハーゲンの問いに、ジークフリートは自分の前に現れたのは水の生き物だけで、「その三羽の水鳥たちがあそこのライン河で、自分が今日中にも殺されると歌っていた」と答える。この言葉にグンターはギクリとするのであり、ヴァーグナーは『ニーベルンゲンの歌』とは裏返しのかたちでうまく自らの作品構造に作り直していることが容易に窺えよう。

その場で重要な役割を果たす飲み物にしても、『ニーベルンゲンの歌』ではハーゲネがわざとワインをシュペサルツの方へ送っていたためその場にはないのに対して、ヴァーグナーではハーゲンが男たちに酒の革袋を取り出すよう命じて、「喉が渴いた」と言うジークフリートにハーゲン自身がそれを差し出す。従って、ヴァーグナーにおいては泉のほとりに水を飲みに行く場面が不必要となり、その代わりに展開されるのがジークフリート自身による語りである。グンターがあまりにもふさぎ込んでいるので、ジークフリートは自らの若き日の冒険を語って聞かせるのである。これがいわゆる「叙事的語り」であり、この語りからジークフリートは自らのアイデンティティを取り戻すのであって、ヴァーグナーの独創による重要な場面である。

ジークフリートはまず鍛冶屋ミーメによって育てられたことから語り始め、父の遺した鋼鉄の破片から名剣ノートゥングを作り上げ、ミーメの案内で森へ行き、そこで大蛇ファフナーを倒し、小鳥たちの助言に従って、洞穴の中で財宝を見つけて、指環と隠れ頭巾を獲得したのち、さらに小鳥たちの忠告に従って不実なミーメを名剣ノートゥングで成敗したことに至るまでの話を一気に語って聞かせるのである。

ここでハーゲンはジークフリートの角杯に新たに酒を満たし、その中に薬草の汁を落とす。それは記憶を取り戻す薬だった。ハーゲンによって差し出されたその角杯を飲んだジークフリートは、次第に遠い過去のことを鮮明に思い出して、ブリュンヒルデとの出会いを語り続ける。すなわち、ジークフリートは小鳥たちの三度目の助言に従って、炎の岩山へ出かけ、その炎を通り抜けて、眠っている愛らしいブリュンヒルデを口づけでもって目覚めさせた次第を語っ

て聞かせるのである。しかし、その目覚めたブリュンヒルデがジークフリートに抱きついてきた場面を語った瞬間、二羽のカラスが藪の中から飛び立ち、ライン河の方へと飛んで行く。この機会をハーゲンは見逃さずにジークフリートの注意をカラスの方に向けさせ、ジークフリートがハーゲンに背中を見せたとき、ハーゲンはその背中に槍を突き刺す。グンターはハーゲンの腕を抑えようとするが、遅過ぎた。グンターが家来たちとともにその行為を咎めると、ハーゲンは「偽りの誓いに復讐をしたのだ！」と答える。ハーゲンはジークフリートの偽りの誓いを殺害の口実としているが、真意はあくまでもジークフリートの所有する指環強奪にあったことは言うまでもない。ただハーゲンはこの場でジークフリートから指環を奪い取るわけにはいかない。ジークフリートは猪によって殺されたことにしてあったからである。そこでひとまずハーゲンは平然とその場から姿を消して、ギービヒの館でその機会を待つことにする。

一方、ハーゲンによって背中を刺されたジークフリートは、ブリュンヒルデのことを思いながら息を引き取る——この点でもクリエムヒルトのことを思いながら息を引き取る『ニーベルンゲンの歌』とは裏返しの関係である——と、葬送行進曲の鳴り響く中、ギービヒ家の館へと運ばれる。そこで夫の帰りを待ち受けていたのはグートルーネである。彼女は悪夢に眠りを邪魔され、不安でたまらない。しばらくして、ジークフリートの角笛ではなく、ハーゲンの角笛と呼び声を耳にしたときには、彼女の不安はさらにつのる。やがてジークフリートの遺骸を運ぶ行列が館に到着し、ますます不安におびえるグートルーネに向かってハーゲンは、ジークフリートは「野猪の獲物」となって死んだと伝える。ジークフリートの遺骸を見たグートルーネは、叫び声を上げて、遺骸の上にくずおれる。グンターは失神した妹を気遣って、妹に話しかけるが、グートルーネは再び我に返ると、グンターを激しく突きのけて、彼がジークフリートを殺害したのだと責め立てる。真相を知って胸のむかつく思いをしているグンターは、「ハーゲンこそ呪われた猪で、ジークフリートをズタズタに引き裂いたのだ」と打ち明ける。するとハーゲンは恐ろしい反抗心を示して、次のように自白する。

Ja denn! Ich hab ihn erschlagen.
Ich, Hagen,
schlug ihn zu Tod.
Meinem Speer war er gespart,
bei dem er Meineid sprach.
Heiliges Beuterecht

そうだ！わしが彼を殺したのだ。
わし、ハーゲンが
彼を打ち殺したのだ。
彼が偽りの誓いを口にしたときの
わしの槍に取っておかれたのだ。
神聖な獲物の権利を

hab ich mir nun errungen: 今やわしが勝ち得たのだ。だから
drum fordr' ich hier diesen Ring. ここでわしがこの指環を要求する。

このハーゲンの自白は、『ニーベルンゲンの歌』前編においてジーフリト暗殺をひた隠しにしたハゲネが後編では逆にクリエムヒルトに向かって堂々と自らの行為を打ち明ける場面(1790-1 詩節)を彷彿させるが、ここではハーゲンが指環を要求している点で『ニーベルンゲンの歌』とは異なる。ヴァーグナーの作品では徹頭徹尾この指環をめぐる争いが展開するのであり、このハーゲンの指環要求に対してグンターが「俺の手に帰したものを、決してお前が得るべきではない」と主張すれば、ハーゲンは自らの剣を引き抜いて「妖怪の遺産をその息子が要求するのだ!」と抵抗する。ハーゲンの本性が明らかである。二人は争い、ついにグンターがハーゲンの一撃で倒れてしまう。この指環をめぐる兄弟喧嘩は『ラインの黄金』第4場における巨人族兄弟の争いを彷彿させるものであり、指環の呪いによる争いであることは言うまでもない。しかし勝利を収めたハーゲンも恐れをなしてしまう。彼がジークフリートの手から指環を抜き取ろうとすると、その手は威嚇するように持ち上がったのである。策略家のハーゲンもその指環を思うように手にすることはできない。その場に居合わせた者も皆、身震いがして金縛りにあったように動かないままの状態である。

そこへ背景から姿を現すのがブリュンヒルデである。しっかりした、厳かな足取りで前景に歩み出る姿は、彼女がラインの乙女たちから真相を聞き知って、知識を取り戻したことを窺わせる。床にくずおれていたグートルーネは激しく跳び起きて、ブリュンヒルデこそこの館に災いをもたらした張本人であると訴える。ここで展開される二人の口論もまた『ニーベルンゲンの歌』における両王妃口論(815-50 詩節)を彷彿させるが、ヴァーグナーではブリュンヒルデが堂々と自分こそがジークフリートの本当の妻であることを主張している点で、中世英雄叙事詩とは裏返しの関係にあると言える。ブリュンヒルデの打ち明けによって真相を知ったグートルーネは、兄グンターの亡骸の上に身をかがめ、その状態で最後まで身動きしないままである。

今や舞台を独占するのはブリュンヒルデである。「神々の力」のライトモチーフが鳴り響くと、彼女は厳かに身を起こして、男女の方を振り向いて、「ラインの岸边に太い薪を高々と積み重ね」、「ジークフリートの馬をこちらへ連れて来るよう」命令する。その準備が進められている間、ブリュンヒルデは再びジークフリートの死体を見つめると、彼女の顔つきはますます安らかな神々しさを増して、亡き愛しいジークフリートの賛辞を歌い終えるや、神々に黄昏が訪れ、

ヴォータンはついに安らぎを得るであろうことを悟って、二羽のカラスを故郷へ送り返すことにする。それからブリュンヒルデは家臣たちにジークフリートの死骸を薪の山に運ぶように指示すると、ジークフリートの指から指環を抜き取り、それをラインの乙女たちに返すつもりであることを歌い終えてから、その指環を自分の指にはめて薪の山の方に向かい、勢いよく馬に飛び乗り、猛火の中へ一挙に飛び込むのである。突然ラインの水が溢れ返る。指環を奪う機会を窺っていたハーゲンは、指環を追って水の中に入るが、三人の水の乙女たちによって深みに引き込まれてしまう。用意周到なハーゲンもこの最終場面に至ってはあっけなく滅びてしまう。『ニーベルンゲンの歌』ではハゲネが最後まで反抗心を示して黄金のありかを決して明かさなかったのとは、まったく裏返しの関係である。一体、この結末は何を意味しているのだろうか。

炎の中へ身を投げるブリュンヒルデの行為は、ニーベルンゲン伝説の原型や北欧のエッダやサガにおける同様の場面を彷彿させるが、ヴァーグナーにおいてはこのブリュンヒルデの殉死の中には「権力に対する愛の勝利」がほのめかされていると言ってもよいのではないか。『ジークフリート』第三幕においてジークフリートが岩山のまわりに燃え上がる炎を飛び越えてブリュンヒルデの愛を勝ち得たように、ブリュンヒルデも今や『神々の黄昏』第三幕最終場面で気高き英雄の亡骸を焼き尽くそうと燃え盛る炎の中へ飛び込んで殉死することによってジークフリートの永遠の愛を勝ち得たのである。今や赤々と燃え盛る炎は二人の愛の炎であると言ってもよいであろう。二人の愛の炎は今やギービヒ家の館から天上の神々のヴァルハルの城にも燃え移って、まさに神々は黄昏を迎えようとしている。ジークフリートの死はこうして神々の没落をもたらしたのであるが、しかし、ジークフリートとブリュンヒルデの愛によってその廃墟の中からはやがて愛する人間の支配する新しい世界が生まれてくることが暗示されていると言ってもよいであろう。ハーゲンの「権力」は滅び去り、ジークフリートとブリュンヒルデの「死による愛」が勝利を収めたのである。

結び

以上のように見てくると、ヴァーグナーは従来のニーベルンゲン伝承を巧みに駆使しながらも、単なる伝承の再構成に終わることなく、自らの新しいニーベルンゲン世界を構築していることが容易に理解されよう。なかでもヴァーグナーはハーゲンを地下の国ニーベルハイムの侏儒王アルベリヒの息子として登場させ、しかもそのアルベリヒの「恨み」をハーゲンに受け継がせることによ

って、自らの呪いの世界を展開させることに成功したのである。この妖怪アルベリヒの憎悪をハーゲンがそのまま受け継いで、「陽気な者たち」へ復讐するところにヴァーグナーにおけるハーゲン像の特質がある。侏儒王アルベリヒと神々の長^{おさ}ヴォータンの争いは今やハーゲンとジークフリートの戦いとなったのである。ハーゲンが陰気な一族の代表であれば、ジークフリートは陽気な一族の代表である。ハーゲンが「暗闇」の世界に属しておれば、ジークフリートは「光」の世界に属していると言えよう。楽劇『指環』四部作全体はこの「暗闇」と「光」の二つの世界の対立である。言い換えれば、「憎悪」と「愛情」との対立、もしくは「権力」の世界と「愛」の世界との対立である。この二つの世界が対立する中でジークフリートはアルベリヒの「憎悪」を引き継いだハーゲンの策略によって暗殺されるが、しかし、その死はブリュンヒルデの殉死によって救済されていると言ってもよいであろう。すなわち、ブリュンヒルデの殉死には「権力に対する愛の勝利」がほのめかされているのであり、ジークフリートがかつて炎を飛び越えてブリュンヒルデの愛を勝ち得たように、ブリュンヒルデもまた今や燃え盛る炎の真っ直中に飛び込んでジークフリートの永遠の愛を勝ち得たのである。二人の愛の炎は赤々と照り輝く炎となって、今や天上の神々のヴァルハルの城にも燃え移って、神々はまさに黄昏を迎えようとしている。この二人の愛の炎によって呪いを清められた指環は、溢れるラインの流れの底に沈んで、四部作冒頭部分と同じ場所に戻る。指環はリング、つまり環になっている本性を示して、またもとの場所に戻ったのである。そしてすべての要素は火と水に還元されてしまった。神々の世界はこうして滅び去ったが、しかし、この廃墟の中からはやがて愛する人間の支配する新しい世界が生まれてくるのである。ここに愛も無残に滅びることを描いた中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』とは根本的に異なるヴァーグナーの新しい世界が読み取られ、それがまたヴァーグナーの魅力となって、ニーベルンゲン伝説の中でも燦然たる輝きを放っているとも言えるのである。

*本稿は平成14年3月16日(土)開催の日本ワーグナー協会関西例会(大阪IMPビル5F会議室)において、ニーベルンゲン伝説とワーグナーの楽劇『指環』四部作(第一部 ニーベルンゲン伝説の系譜、第二部 ワーグナーの楽劇『神々の黄昏』におけるハーゲン像の特質)というテーマで口頭発表した第二部原稿に加筆修正を施したものであることを付記しておく。

注

- 1) 本稿執筆にあたってテキストには≫R.Wagner:Götterdämmerung. Reclam 1979◀を用い、テキストの邦訳は拙訳である。
- 2) Paul Hermann (Übertragen): Die Geschichte von den Völsungen. In: Isländische Heldenromane.(Thule 21. Band) Eugen Diederichs Verlag in Jena 1923.
- 3) Arthur Häny (Übertragen): Die Edda. Götter- und Heldenlieder der Germanen. Manesse Verlag, Zürich 1987.
- 4) Arnulf Krause(Übersetzt): Die Edda des Snorri Sturluson. Reclam, Stuttgart 1997.
- 5) Hans Sachs: Der hürnen Seufrid. Tragoedie in sieben Acten. Max Niemeyer, Halle a/S.1880.
- 6) Walther Ziesemer(Hrsg.): Fouqués Werke. Zweiter Teil. Der Held des Nordens. Deutsches Verlagshaus Bong & Co.
- 7) Fine Erichsen(Übertragen): Die Geschichte Thidreks von Bern(Thule 22. Band) Eugen Diederichs Verlag in Jena 1924.
- 8) Helmut de Boor(Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage. F.A.Brockhaus, Wiesbaden 1972.
- 9) Friedrich Hebbel: Die Nibelungen. Ein deutsches Trauerspiel in drei Abteilungen. Reclam, Stuttgart 1974.
- 10) 山崎太郎訳: ジークフリートの死 (三光長治・高辻知義・三宅幸夫・山崎太郎編訳: ワグナー『ラインの黄金』白水社1992年所収)
- 11) 高辻知義訳: ニーベルンゲン神話 (同上書所収)
- 12) 『ティードレクス・サガ』にも隠れ頭巾が用いられていることからすると、『ニーベルンゲンの歌』の素材(前段階)にも用いられていたと推定されるが、現存する作品としては『ニーベルンゲンの歌』が最初である。